

ウルリム  
響

# 響

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第37号

2005年11月20日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: [ikuno@nskk.org](mailto:ikuno@nskk.org)

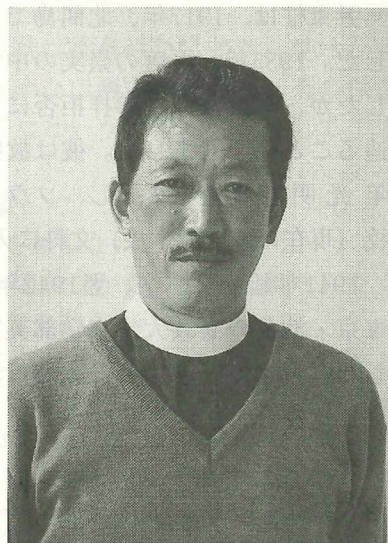
## 新しい一日の始まり

武藤 謙一

ユダヤ教のラビが生徒に質問しました。「あなた方は何を見て新しい一日が始まると思いますか？」一人の生徒が答えました。「太陽が丘から昇り、明るくなった時、新しい一日が始まったと思います。」別の生徒が答えました。「隣の丘を見て木か人間か見分けられた時、新しい一日が始まったと思います。」別の生徒が答えました。「谷を見て、ヤギかロバか見分けられた時、新しい一日が始まったと思います。」最後にラビは言いました。「新しい一日が始まったと言えるのは、見知らぬ人の顔が友達に見えたときです。」

わたしがこのラビの話を初めて聞いたのは、2001年10月、ポール・ラッシュ祭感謝礼拝の時です。この礼拝の説教者は当時キープアメリカ後援会の理事でバージニア教区の退職主教ヒース・ライト主教でした。ヒース・ライト主教はこの話しを紹介し、一ヶ月前に起きたアメリカでのテロでアメリカにはまだ悲しみ、怒り、憤りが残っているけれども、アラブの人々とアメリカの人々、イスラム教徒の人々とキリスト者が、見知らぬ顔から友達顔となり新しい一日が始まる可能性があること、賢い対応ができることを訴えられました(結果的にはアメリカは報復攻撃を始めましたが。)この年のポール・ラッシュ祭では多くの人々と一

緒に世界平和のための祈りも捧げられ、印象深いものとなりました。清里聖アンデレ教会は横浜教区の一教会ですが同時にキープ協会のチャペルの役割をもった教会です。キープ協会の働きを表わす



言葉の一つは“Connecting the Separated”(「分かれたものをつなぐ」)です。キープ協会が実際にその通りに使命を果たしているかと問われれば、まだまだ足りないことも多くあります。しかし神と人、人と人、人と自然をつなぐことができるようにと祈り願いながら歩んでいます。わたしはこの言葉が本当に大切だと清里に感じています。イエス・キリストの地上での生涯、そして十字架の死と復活は隔ての壁を取り除くためのものだったからです。そしてわたしたちに託された使命も「和解の務め」であり、異なるものをつないで一つにすることにあるからです。

聖公会生野センターの働きもまた「ことなるものをつなぐ」大切な働きです。目に見えない隔ての壁を取り除くことはなかなか簡単なことではありませんが、新しい一日が始まることを信じて、多くの皆さんがこの大切な働きのために祈り支えてくださることを願います。

(むとう けんいち 横浜教区司祭 管区宣教主事  
聖公会生野センター理事)

### もくじ

1. 新しい一日の始まり
2. 時のしるし『伊東柱の風』
3. 差別された子どもを前にして、私たちはどこに立つのか
4. 二泊三日の韓国記
5. こう変わった・こう変わる＝聖公会生野センターの法人化③
6. こんな本あります 「本から在日コリアンを考える」②
7. 詩『コンビニにキムチ』
8. 編集委員リレーエッセイ/余韻

「山の麓をめぐる 田んぼのそば ぼつんとある井戸を ひとり尋ねて行っては、そっとのぞいて見ます。

井戸の中には、月が明るく、雲が流れ、空(天)が広がり、真っ青な風が吹き、秋があります。」

これは尹東柱の「自画像」という詩の冒頭です。1939年9月の作。

尹東柱は、1917年、北間島<sup>フッカンド</sup>で生まれ、育ちました。1935年、平壤<sup>ピョアン</sup>の崇実<sup>ソンシル</sup>の中学に編入学しましたが、崇実<sup>ソンシル</sup>は神社参拝拒否により廃校の道を辿ることになりました。彼は故郷に帰り、1938年<sup>フアンミョン</sup>光明<sup>ヨソフイ</sup>中学校を卒業し、ソウルの延禧<sup>ヨンヒ</sup>専門学校(現在の延世大学校)文科に入学しました。

1941年延禧を卒業、翌1942年に日本に渡り、東京・池袋の立教大学文学部英文科に入学しました。日本に渡るために、彼は名まえを「平沼東柱(ひらぬま・とうちゅう)」としなければなりませんでした。

同じ1942年秋、彼は京都に移り、同志社大学英文学科に入学しました。

翌1943年7月14日、京都・下鴨警察に逮捕され、本と作品、日記などが押収されました。治安維持法第5条 違反。民族の独立を願って友と語り合った。日本によって奪われつつある民族の言葉で詩を書いた。これが犯罪とされたのです。3月31日、京都地方裁判所は懲役2年の判決を下しました。尹東柱は九州・福岡刑務所に投獄されました。

逮捕からおおよそ1年と7ヵ月後、1945年2月16日未明、午前3時36分、尹東柱は福岡刑務所の真冬の冷たい独房で息を引き取りました。解放の日の6ヵ月前でした。彼を殺したのは大日本帝国です。

尹東柱の美しい魂は、風となって、日本から故郷に帰って行きました。韓国に、北間島に。そしてもうひとつの故郷、天の国に、彼に息を与え命を与えた神のもとに帰って行きました。

尹東柱の時代、よこしまな、邪悪な風が吹い

ていました。日本帝国主義の風、天皇制国家の風、暴力の風、人を奴隷化する風です。この悪しき風の中で尹東柱は苦しみ、満27歳で、ひと(よそ)の国(「たやすく書かれた詩」)で、冷たい福岡刑務所の独房で息を引き取らねばなりませんでした。

しかし彼は、もうひとつの風を知っていました。人を自由にする風、人を生かす風、使命を与えて立ち上がらせる風、イエス・キリストのように十字架への道を歩ませる風、すべての死んでいくものを愛させる風です。聖書的に言うなら、聖霊の風です。

その風が、尹東柱の中に吹いていました。その風が吹いたので、彼は、北間島から平壤へ、ソウルへ、そして釜山<sup>プサン</sup>を経て東京へ、京都へ来たのだと思います。

尹東柱の中に、尹東柱と共に、聖霊の風が吹いていました。

尹東柱の深い井戸には真っ青な風が吹いていました。尹東柱の歩んだところには命の風が吹ききました。

尹東柱が日本の福岡で息を引き取ってから60年、今、日本では再びよこしまな風が強くなっています。人を奴隷化する風、暴力の風、侵略戦争と植民地支配を美化・正当化する風です。人と国と民族を分断する風です。人を抑圧する風、平和憲法を改悪し、再び戦争する国に造りかえようとする力が働いています。

今、そのような時期に私たちが尹東柱を追憶し、記念することは、尹東柱の中に、尹東柱と共に吹いていた風と一緒に経験することです。人を自由にし、闇を追いやり、命を与える風、人と国と民族の壁を壊し、交流させ、連帯させる風です。日本の敗戦60年——尹東柱をとおして聖霊の風を受けて歩みたいと願います。

(いだ いずみ 京都復活教会牧師)

## 尹東柱の風

## 井田泉

## 差別された子どもを前にして、私たちはどこに立つのか 金光敏

私は、各地の学校や子ども、保護者の姿にふれながら、日本社会の現実を目の当たりにしてきた。冷笑主義に走ってはならないが、「共生」などという言葉、日本社会にそのかけらもないと、叫びたくなることが多い。

ある小学校で、韓国からの渡日児童が、4年間にわたって差別され、いじめられ続けていたことが発覚した。現在6年生の当事者から聞き取りをし、その深刻な事態を知った。その聞き取りの2日前にも嫌がらせを受けていた。私は、大阪府教育委員会に一報を入れ、早急に事態を把握し、対応するよう求めた。府教委は、当該の市教育委員会を通じて、学校現場に事態を告げ、学校は対応をせまられることとなった。

当事者児童の聞き取りによると、学校は自分が嫌がらせを受けていることを知っているとのことであり、相談した先生からは「気にせずがんばるよう」に言われたと語った。この児童の家庭は、オモニと二人暮らしで、オモニは児童が学校から帰ると、夜、働きに出る。夜もたった一人の家で過ごすこの児童は、いじめられてきたことを誰に話すこともなく、今日まで懸命に生きてきた。私と、地域を担当する民族講師の前で、この子は心配かけまいと気丈にも「だいじょうぶ」だと笑った。ほっそりした手の中にある大好きなボーイフレンドと撮ったプリクラを見せながら。

その後、学校は教育委員会からの指摘を受け、担任が一人、家庭訪問し、悪かったと詫言った。教育委員会からの指摘がなければ、学校は何もしなかっただろう。いや、指摘があってもこの程度である。学校で子どもが民族差別で4年間にわたり苦しんできた現実を突きつけられても、家庭訪問したのは担任一人である。学校の対応としては最悪だ。

通学中に事故や暴力の巻き添えに遭い負傷でもすれば、校長や教頭が担任とともに家庭訪問し、保護者に対して発生した事象について説明し、管理不行き届きを詫言するのが通常であろう。また、さらに詳しい真相を究明し、再発防止に向け学校側の方針を伝えるはずだ。しかし、この学校では、コリアンの子どものが、4年間にわたって差別を受けてきた事象について、担任一人が謝罪すれば、学校側の責任は果たせると考えたようである。民族差別は、学校現場ではこのようにして軽く扱

れているのである。

またある中学校では、コリアン生徒にクラスメートが嫌がらせの手紙を送りつけた。その生徒は、小学校時代にも民族差別を受けており、それを聞きつけた保護者は学校側に抗議し、自らの言葉で、差別手紙を送りつけた生徒たちと保護者に会い、在日としての思い、差別された痛みを語りたと言われた。

ある夕刻にその会は持たれた。差別を受けた生徒の保護者は、静かな口調で加害生徒とその保護者たちに語りかけたという。静かに、そして丁寧に。

その光景を想像して、こみ上げる心の叫びと、抑えきれない痛みを感じないだろうか。

私はその光景を聞きながら、涙を止められなかった。悔しい気持ちを抑えられなかった。

ただ、その場にいた教職員は違った。少なくとも学校長は。

学校長は、その後、私に「その場をもって差別事件は解決した」と平然と語った。

これは、ほんとうに心持つ人間の言葉なのだろうか。被差別の当事者が痛みをさらけ出し、二度と差別しないしてほしいと訴える姿を目にしても、揺り動かされる心無く、学校の責任、教職員の責任は放置されたまま、ただ「解決した」と平然と語るのだ。

一体誰にとつての「解決」なのだろうか。

教育委員会の責任がもっとも大きい。このような学校管理職、教職員を任用したのは、教育委員会である。教育行政そのものが、マイノリティの子どもたちの教育に無防備、無認識なのである。子どもの最善の権利を守るために、私たちはひるまず厳しく対応していく。

在日問題に理解があるとかないとかの問題を超え、子どもたちと向き合っているのかと学校に問いたい、教職員に問いたい。日本社会は、どこまで無感覚、不感症、無関心なのか。あまりのひどい差別の現実は何度私自身が倒れそうになったか。いや、そんな現実の中で、子どもがたった一人闘っている。何があってもこの子らの側に立つ。死んでも子どもの側に立つ。この子らを殺すなら、私を殺してくれ。私たちは絶対退かない。

(きむ・くあみん コリアNGOセンター事務局長)



## 二泊三日の韓国記

大澤 辰男

10月の3・4・5日の二泊三日、聖公会生野センター総主事の呉光現さんと僕の二人で韓国のソウルに行ってきました。今回の韓国行きの目的は二つ。

- ① ソウル市立美術館で開催されるCity net Asia展に僕の作品が展覧されるため、展示に立会い、パーティに出席すること。
- ② クリンもだん美術教室とソウル市立の団体とで来年、交流展を開催するための打ち合わせをすること。

一つ目のソウル市立美術館での展覧会は、僕も初めての国際展の出展だったので少し緊張したのですが、美術作家として良い勉強になりました。この話はまた機会があれば詳しく述べたいと思います。二つ目の目的のクリンもだん美術教室と韓国との交流展ですが、これも順調に話しが進み、来年春ソウルで開催される催しにクリンもだん美術教室が参加し、毎年秋に開催するクリンもだん美術展に韓国側に参加してもらい、一年かけて交流を深めようということになりました。そして、再来年には日韓交流展を開催しようということになりました。二つの仕事はすぐに済ませることができたので、夜はほとんど観光気分でした。僕にとって、韓国は初めてだったので本当におもしろかった。また、呉さんといっしょだったのがより楽しい旅にしてくれました。ほとんどガイド役。夜は二人ともずっと酔っ払っていて、呉さんはずっと韓国の俳優のモノマネをしていて会う人会う人にそのモノマネを披露していました。僕はその韓国の俳優を知らないで似ているかどうかまったくわかりませんでした。・・・(モノマネを見せられた人に似ているのか本当のところを聞けば良かった。) 韓国料理も美味かった。残念なの



は、やはり辛い！ので食べているとくちびるが痛くなってきて、たくさん食べられなかったことです。それと、町を歩いていて思ったのが、容姿が優れている女性が多かった。これはキムチやにんにくを使った食品を日常的に食べているせいだろうか？男の人達は姿勢が良い。猫背でだらだら歩いている人がいない！みんな背筋が伸びている。若い人で茶髪がない。みんな声が大きい。(最初は喧嘩しているのかと思った)。車の運転が荒い。(バンパーに傷がある車が多かった)。バスもめっちゃめっちゃ速かった。繁華街でねんねこを着て赤ん坊をおぶっているおばあさんを見た。(日本ではもう見かけない光景)。とにかく、全体的にアグレッシブな国という印象がしました。でも一番印象に思ったのは、町を往く人達の立振舞いが、子どもは子どもらしく、若者は若者らしく、大人は大人らしいということです。清々しい印象を持ちました。これは、今の日本が少し忘れかけていることだと改めて思う二泊三日の韓国旅行でした。来年の春に交流展で再度韓国へ行くのが楽しみです。

(おおさわ たつお クリンもだん美術教室講師)

## 知的しょうがい者のデイサービスを始めます

呉光現

NPO法人になった動機の一つに法人でないといけない事業をおこなうことができました。具体的には3年以上前からクリンもだん美術教室で話題になっていた知的しょうがい者への取り組みです。現在クリンもだん美術教室には22名の方が週に1回又は2回通っています。「純粋な美術教室」ですが、22名のうちに17名が何らかのしょうがいを持っていて、美術活動をするのに介助のボランティアが欠かせません。来年3月には何人かの受講生が高校を卒業することになり、何らかの取り組みが迫られていました。芸術活動、生活、福祉などが一つの固まりとして何かできないだろうかと模索していたのです。しょうがい者が美術活動をする時には多くの人々の関わりが必要になります。特に学校を卒業するとたちまち生活の場が制限される人が多くいる現実を見てきました。そこで彼ら／彼女らの美術活動をサポートしていくためにも「生活」に関わることにしました。

クリンもだん美術教室で保護者会を何度か開催し、いろんな人の様々な思いと意見を伺いました。そして、たくさんの論議を経て「人にお任せではなく、共に作り上げていこう」となり、来年から美術教室の高校卒業生を対象にして「知的しょうがい者」デイサービスを始めることになりました。これは、任意の団体ではできません。法人に限定されます。そこで来年の法人の総会に議題として以下の3点について定款に追加することを臨時の理事会で決議いたしました。

1. 身体障害者福祉法に基づく居宅介護等事業、短期入所事業、デイサービス事業

2. 知的障害者福祉法に基づく居宅介護等事業、短期入所事業、デイサービス事業、地域生活援助事業
3. 児童福祉法に基づく居宅介護等事業、短期入所事業、デイサービス事業

具体的には2のデイサービスですが、将来的におこなう可能性のある事業についてもこの際、定款変更をしておこうと言うことで合計、3つの項目を加えました。当面は財政的には厳しい状況が続くかと思いますが、「一人一人を大切に」という当初からの思いを大切にしていきたいとおもっています。

この活動を始めることにより、私たちは一歩踏み出すことになるかも知れません。現在でも実施している活動(のりばん クリンもだん美術展など)に行政や民間助成団体から助成金等を受けたりしていますが、あくまで補助的なものです。それが法に基づく制度で事業を始めることは大きな変化にもつながるかも知れません。今後、この事業の始まりを契機にして地域に暮らす人・特に知的しょうがい者の「生活」とどう関わっていくのか聖公会生野センターの新しい可能性と課題が生じていくことになるでしょう。

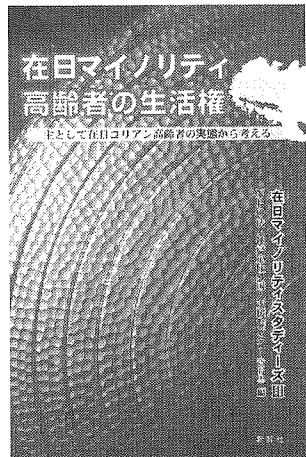
\* 文中一般的には「障害者」と表記されていますが「しょうがい者」と記しました。「障害=差し障りがあり、害になる」という考えには同意できないからです。よろしくご理解お願いします。

(お・くあんひょん 聖公会生野センター総主事)

本から「在日コリアン」を考える ②3

在日マイノリティ高齢者の生活権  
主として在日コリアン高齢者の実態から考える

NPO法人神戸定住外国人支援センター (KFC) 編



定価1200円+税  
新幹社

人間は必ず死ぬ。それと同じように老いる。だが人間はその厳然たる現実とむきあうことが好きではない。そして在日朝鮮人社会にも、すでに高齢化社会はやってきている。なのに今さら本を出すなんて、遅きに失した感否めないが、それでも気がついたのなら、その時からが始まりとなる。

在日朝鮮人は一般的に家族の絆が強い。だが長い日本暮らしの中で、つまり日本資本主義の価値体系の中で、以前からの家族意識を存続させることは困難なこととなった。家族意識が強いことが結論として良いと言いたいわけではない。

わが家で言えば一世の父母が肉体労働をしながら子たちを育て、育った子たちが家を出て独立し、新しく家族を持ち子を育てる。子の育て方が一世と二世で異なるように、家族に関する考え方も異なる。亡父はテレビのホームドラマで穏やかで仲良く暮らすテレビの中の「家族」をうらやましそうに見ていた。植民地時代に日本に来た一世からすれば、戦後日本の価値観の変遷は激しく、世の流れについていくのが精一杯だったのだと思う。それは程度の差はあれ、日本の同世代にも同じことが言えるかも知れない。

だが、老いた在日朝鮮人の一世は同世代の日本人とは老後の過ごし方が決定的に異なる。異国で暮らすと言うことの辛さが、若い時ならともかく、歳をとると出てくるのである。

若い時、歳をとっても年金はもらえないのだから、老後のために頑張っ稼ごうと思ひ、人の二倍は働く。だがすべての人がそううまくいくとは

限らない。蓄えは残らず、無理がたたって身体にガタが来ているというのが大方だ。歳をとって、生きていくための糧が保証されていないのは、何とも心細い限りだ。だが、待てよ、(国民)年金に加入したくとも排除してきたのは日本国のほうではないか。それなのに未払い期の措置はとられず、年金が支払われないのは、なんと理不尽なことか。

生きる糧という意味では年金問題というのは避けて通ることはできない。だが、実際に年老いた親を持って感じるのは、日本人とのカルチャーギャップであり、孤立感(疎外感)である。私の両親は近隣に同胞がいない地域で30年暮らしてきた。かといって日本人と、とりたてて親しくしてきた人もいない。友だちが近くにいないのである。

地域の老人が集まる場所に行っても、言葉が違う、食べ物が違う、風習が違う・・・、それでくたびれ果てて帰ってくる。気を遣ってしまうのだ。八十を過ぎた親に、違うことはいいことだ、と言っても効果はまったくない。ちょっとでも楽しい老後をおくってほしいと願っていたが、それは高望みかも知れない。マイノリティが、マイノリティに思いを寄せないマジョリティと共に生きていくことは苦しいことだ。

本書を出版するに際して、とりわけ在日コリアン高齢者の福祉サービスの現況をみながら、同胞の集住地域に暮らす老人はまだしも幸せだと思った。同胞同士だからといって、いつも仲良しだとは限らないが・・・。子ども社会のいじめや引きこもりなどを見ていて、社会の縮図だとよく言われるが、高齢者社会はさらに矛盾を孕んだ縮図といえるかも知れない。

本書によっていろいろな地域での取り組みを知ることができる。いろいろな地域が連携することは良いことだし、この取り組みならって、新たに創り出すことも良いことだと思う。

(こー いさむ 新幹社代表)

『在日マイノリティ高齢者の生活権—主として在日コリアン高齢者の実態から考える』は聖公会生野センターで取り扱っています。  
TEL 06-6754-4356 FAX 06-6754-4357  
e-mail: ikuno@nssk.org

高二三

どの街のいたるところ  
コンビニのショーケースに  
クサイカラいと  
ついこのあいだまで  
忌み嫌われていた  
キムチが  
グリーンサラダと  
同じ棚に  
並べられ  
売られていることへの  
おどろき  
コリアタウンへ  
求めていかずとも  
キムチが  
どの街なかでも  
すぐ身近に  
ありふれていることの  
奇蹟

普段化された  
キムチに  
守られるような  
救われるような  
励まされるような  
安堵感  
差別の  
記号で  
ありえなくなった  
キムチで  
日本と韓国が  
ザイニチの頭越しに  
商戦を  
くりひろげる  
その抜け目ない時代への  
惜しめない称讃と  
うらはらの憂鬱

キムチひとつのこと  
おびえ  
もだえ  
くるしんでいた  
ザイニチの記憶  
死にぎわの失笑を経て  
結晶と化した  
被差別意識への  
郷愁  
何事でもなく  
コンビニにキムチ  
そのあたりまえの  
複雑さと  
ザイニチの  
ただならぬ  
感慨

コンビニにキムチ

丁章

丁章 (ちよん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)

詩集『マウムソリ -心の声-』(新幹社)

詩集『闊歩する在日』(新幹社)

丁章さんの詩集(第3集まで発刊)は聖公会生野センターでも取り扱っています。



伊藤 美佐子

ある病院の緩和ケア病棟で、ソーシャルワーカーをされている方の話を聞きました。そのなかで、“人生のライフライン”を描くということをお話されました。彼女の仕事のひとつは、緩和ケアに来られた方、それぞれのライフラインをお聴きすることだそうです。人は話すことにより、自分の生きてきた人生の意味を、感じることができるのです。生きてきて良かったと、実感できるのです。ライフラインは、自分が生きてきた道筋を、1本の線をつないでいく自分史です。その日は、それぞれが自分のライフラインを描きました。「誕生」からスタートして、自分のこれまでの人生を一本の線で表現してみます。私はライフラインを描き、隣の方に、聞

人生のライフライン

いて頂きました。10分間という短い時間でしたが、自分のことを聴いてもらうというとても嬉しい経験でした。ライフラインを描くということは、自分のこれまでの人生を振り返ることができ、意味のあることだと思います。また機会を作って、じっくりと取り組みたいことです。

聖公会生野センター「のりばん」は、オモニ・ボランティア・訪問者等多くの方々の出会いの場であり、楽しい交わりの場です。それぞれが、さまざまなライフラインをお持ちのはずです。交わりの中で、ボランティアに話されるオモニの話に、人生の重みを感じ、吸い込まれていきます。「のりばん」が、オモニとボランティアのそれぞれがライフラインを描き、互いに話しを聴きあう場になったらいいなあと思っています。  
(いとう みさこ)

余韻

■介護保険改定。障害者自立支援法制定。総理の靖国神社参拝、とそれを肯定的に評価する次期「総理候補たち」。改革の下に進められる社会的者への負担増と近隣アジアとの友好への遠い道のり。在日として生を受け、48年。今こそマイノリティーとして危機感を感じる時は無い。■相変わらず忙しい日々を送っているが、嬉しい事も少々……。人生の大先輩の作家の金石範先生の

選集が刊行された。間違いなく100年後も読み継がれている作家だ。日本文学ではなく日本語文学としての地位を高めた金石範さんのお祝いに関わられた事がこの秋の慶事だろうか？そう言えば、金石範さんは常に、文学作品、文章、そして発言・行動を通して日本社会を告発してきた。私も原則を大切に生を貫いて行きたい。(ぴっくあんちゃ)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
  - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
  - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
  - ・銀行振込 U F J 銀行 東大阪支店  
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター  
〒544-0003  
大阪市生野区小路東1-17-28  
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357  
E-mail: ikuno@nssk.org  
<http://www.nssk.org/province/ikuno>  
発行人：宇野 徹  
編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。